

Title	レオ・ベック「ハルナックの講義『キリスト教の本質』批判(一九〇一)」
Author(s)	津田, 謙治
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.50, 2011.3 : 231-257
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3115
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

レオ・ベック「ハルナツクの講義『キリスト教の本質』批判（一九〇二）」

津田 謙治 訳

《解 説》

本稿は、レオ・ベックが一九〇一年に『ユダヤ史とユダヤ学』という学術誌上で発表した論文を翻訳したものである (Bäck, Leo, "Harnack's Vorlesungen über das Wesen des Christentums," in: *Monatsschrift für Geschichte und Wissenschaft des Judentums*, Breslau, 1901, S.97-120.)。ベックは一八七三年五月二十三日にポーランドに生まれた。ブレスラウで学んだ後、二十二歳の時にベルリンでスピノザに関する博士論文を書いた。二十四歳の時から十年間、彼はポーランドのオポーレでラビとして働いていたが、本稿はその時に執筆されたものである。教義史の大家となっていたアドルフ・フォン・ハルナツクが著した『キリスト教の本質』(一八九〇)に対して果敢に論戦を挑んだベックは、当時まだ二十八歳の若さであった。ユダヤ教を不当に低く見積もる風潮に対して感情的な記述も散見されるが、ファリサイ派やラビなどに関するイエス時代の分析は、当時の教義史家たちに欠けていた視点を浮き彫りにし、示唆に富んだものである。本訳稿を通じて、ベックと近代ユダヤ学の一端に光が投げ掛けられることを望む。

アドルフ・ハルナツクの書物⁽¹⁾は、多くの学識を所有し、その学識に尊敬の念を抱くことの出来るすべての者によって、敬意をもつて受け容れられるであろう。このような尊敬の念は、無意識に、この作品に対する最初の批判ともなるであろう。特に、キリスト教の歴史的な基盤と宗教的な内実に関して説明しようとする本であれば、尚更である。既にこうした主題をもつこの本の影響力によって、このような感情が強いられている。

特異性過敏体質〔Atopie〕、即ち〔書物の〕題名と中身との間の矛盾を指摘することに躊躇し、そのように躊躇することが、この講義の中や、非常に広い範囲でも繰り返し強制されているのは残念である。極めて恣意的な構想と方法的説明が、互いに鋭く対立している。純粹に弁証論的な特色をもった著作が、純粹な歴史を呈示する要求を掲げて我々の前へと歩み寄っている。確かに、「このハルナツクの書では」弁証論的な傾向は明白に拒絶され、歴史的な特性が強調されている。第一講義で述べられた序言は、はっきりと次のことを主張している。「キリスト教とは何か。——ただ歴史的な意味において、我々はこの問いに答えることを試みたい。即ち、歴史学を手段として、また経験された歴史から獲得された生の体験によって、この問いへの解答を試みよう。それ故に、弁証論的かつ宗教哲学的考察は除外する」(四頁)。しかし、これは単なる理想論に留まり、その理想の輝きに読者が喜ぶこともあるだろう。

歴史家ハルナツクにとつても、キリスト教は、互いに包括される三つの領域に他ならない。それは、神の国、人間精神の無限の価値、そして生において表出される「より良き」正義である。それ以外に福音の中に見出されるものは、実際にはその中に含まれない。禁欲的生活は概して福音の中に位置付けられない。福音は財産所有の否定を説いておらず、「連帯」と「援助」がその根本的な内実である限りにおいてのみ、それは社会的なものである。また、それは権利のための闘争を禁じておらず、また文化事業に対しても敵対的ではない。「神の子イエス」という命題は、福音にとつ

て異質なものである。しかし、福音を受容する者は、宣教においても同じように「神的なものを地上において現れたのと同様に純粹に現れていること」を証言しなければならぬ。ただ一つの信仰告白があり、それは「信仰を行動によって証明すること」である。その他に、パウロの功績は、救いの成就として、既に起こった救済として、古いものを廃止する何か新しいものとして福音を理解し、またこの新しいものがすべての人々に属すると彼が認識したことである。また最終的に、靈的に「歴史において獲得された素晴らしいもの」と福音を結び付けたことも彼の功績である。「神を父として認識し、知覚すること、救済の確信、神において恭順し喜びを感じること、行動と兄弟愛」——これらすべてが、この知らせを宣べ伝えた方と結び付けられている——それは、ハルナックがキリスト教の本質として見出した最終的な結論である。

このような弁証的な特徴を、これについては更に多くの例を指摘するべきであるが、ハルナック自身も認識していたようである。というのも、あたかもそれが正当な根拠のあるものであるかのようには、本質を探し出すことが歴史家の義務であると彼は繰り返し説明しているように見えるからである。事実、歴史記者が、ある時代の精神的な活動を描写しようとするのであれば、その本質へと自らの注意を向けるべきである。しかしその場合、特に宗教史家にとっては、二種類の事柄が注意深く区別されなければならない。それは、かの時代にとつて、大きな意味をもっていたのは何であったか、そして、この目的が達せられたならば、そこから見て、今日の宗教史家自身がそれに対してどのように判断するかである。ハルナックはこの二つを常に厳格に分けていたのではなかった。歴史家は語るだけでなく、判断し、それどころか一方に加担し、擁護し、他方を弾劾することは自明である。しかし歴史家は、自らの判断を、叙述している時代の判断と混同してはならない。歴史家は自分の価値概念を、かの遠い過去に対して造り上げてはならないし、「何が重要で、何が重要でないか」の評価が、自分が今日用いているのと同じ規準に従って、当時にも付与されると考えてもならない。「時間は変化し、我々はその中で変化する」〔*Tempera mutantur et nos mutamur in illis*〕のである。歴史家が現在

という立脚点から、ある事柄を非本質的なものとして判断するとしても、その事柄は、この者が記述する時間（即ち、かの時代）において、極めて重要で意義深いものであったかも知れない。歴史家はその事柄を非難し、また遺憾に感じることもあるかも知れないが、だからといってそれを、かの時代において拒絶してはならない。歴史的な事実の確認の際に——ある人物とある世紀の思考様式が一つの歴史的事実でもあるが——、歴史家の価値判断は決定的なものであってはならない。そして、「活けるものに対する鮮明な眼差し」（九頁）は、極めて簡単に判断を誤り得る。アリストテレスの美しい言葉によれば、詩文は哲学的であるが、現実のものではない。「活けるものに対する鮮明な眼差し」をもつた芸術家の眼は、既に頻繁に歴史家を欺いてきた。ある時代と運動を叙述しようと望む者は、とりわけ自分の眼でそれらを観察しなければならず、自分にとっては今日多くのものがそれらと調和しないように見えることもあれば、自分の芸術的な要求と矛盾することもあるだろう。その時に初めて、我々がその時代において何を本質的で不変なものとして見做さなければならぬかを、歴史家は問うことが許されるのである。それを別のやり方で行う者は、歴史構造と虚構を歴史叙述の場に措定している。客観的な歴史家として自分の宗教の起源について語ることは確かに並外れて困難なことである。しかし、それが約束されたならば、それを保持しようと試みられるべきである。

リツチュル [Albrecht Ritschl] の弟子であるハルナツクがそのことを正当に評価しないのであれば、それは遺伝的欠陥のように見える。ハルナツクの著作のこのような根本的欠落について言われているものの中で、最も的確なものは、テオバルト・ツイーグラー [Theobald Ziegler] がリツチュルの体系に対して行った判断の中に含まれている。「信仰の諸命題が人間にとつてもつ価値から、それらの正当性と、それらにとつて根源的な本質を推論することによって、願望が信仰の父であるというフオイエルバッハの説にリツチュル神学は接近しているのである。しかし、まさにこのような表現形式において、この不幸に満ちた神学は存立している。というのも、この神学は自らが望むものを、批判的に掲げている、結局は単に価値が高いために真であると規定しているからである。これは確かに楽であるが、カント的でも

なければ、誠実なものでもない」。

これに類似したものを、ガス〔Wilhelm Gass〕^{*1}がキリスト教倫理思想史の中で強調している。彼は、リツチュルの歴史叙述の立場がドグマ的であることを示唆している。

殆どどのように見ても、このことはハルナツクの講義にも言われ得るであろう。ハルナツクにとつてキリスト教において本質的と見られるものは、宗教の創唱者にとつても本質的なものであった。歴史的変遷の観察によつて弁証家ハルナツクが最終的な結論として、つまり、彼の観点に従つて重要で不変なものとして評価されたと思われるものは、歴史家ハルナツクによつて宗教の起源へと不当なかたちで移し入れられている。過去が我々の前に呈示されるのではなく、これまでに理解された図像の投影が、過去の中に導き入れられているのである。卓越した弁証的著作でも有り得たこの講義録は、多くの異論の余地を含む歴史素描となった。「私の宗教」ないしは「私のキリスト教」とさえも呼ばれるべき〔この書の〕標題が、不適切にも「キリスト教の本質」を内包しているとされている。この点に、この書の特異性過敏体質〔Atopie〕²がある。

この特徴を示す証拠を、神の国の確信が示している。それは、ハルナツクがイエスの宣教から形成しようとした三つの項目〔一「神の国とその到来」、二「父なる神と人間靈魂の無限なる価値」、三「より優れた義と愛の命令」〕の最初のものである。ハルナツクが次のように述べている点は正しい。即ち、その宣教が、「旧約的な色彩を帯びた、審判の日についての預言者的な告知と、未来において到来する視覚可能な神の支配から、現在始まっている、イエスの知らせと共に掲げられた内的な〔神の〕国の到来の思想に至るまでの、あらゆる表現と形式を通底している」〔三四頁〕ということである。この最後の部分を、根源的形式として、イエスが実際に所有していたものとして彼は理解しており、他のすべてのものは、この時代の言語による説話に過ぎず、発話の在り方〔eine façon de parler〕⁽²⁾である。このことはまた、想像されるように、一方や他方を指示する歴史的な証拠を精査し、比較することによつて、「立証される」

ことではない。むしろ、次の文章が極めて決定的なものである。「これと同様な場合に、卓越した真に画期的な人物たちを、彼らが自分の同時代人と共通にもつているものに第一に従つて判断し、この者に固有かつ偉大であつたものを背後に押し込めてしまふのは見当違いである」(三五頁)。

ハルナックが今日、イエスの宣教において最も重要で偉大であると考えるものを何と捉えるのか、そしてハルナックにとつて何が最も心に訴えたのかを我々に語ろうとしたのであれば、先程の議論は正しい原則であつたかも知れない。しかし、ハルナックが、自分によつて重視された見解がもつばらイエスの靈的な特性であると主張するならば、——「言葉には寛容であれ」(sit venia verbo)——自分自身をイエスと混同したということは無かつたと言えるのであろうか。芸術家的な善意によつてそのようなことを証明出来たとしても、それはいづれにせよ歴史叙述ではない。ハルナックが行つたように、そのように語ることは説教師には許されていても、歴史家には許されていないのである。

別の例を挙げてみよう。イエスの説教が反世界的ではないことをハルナックは証明しようとしている——周知のように、福音の立場としては難しい課題であるが——。彼の「決定的な」証拠は次のようなものである。「神への信仰、恭順、罪の赦し、そして隣人愛によつて示される円環の中に、他の如何なる原則も、少なくとも法的な原則は挿入され得ない。また、イエスは、どの意味で神の国が『世界』と対立したかをも同時に明らかにしている。『思い煩うな』、『あなた方の天の父が慈悲深くあるように、あなた方も慈悲深くありなさい』などのような言葉に、同様の価値判断を要求して、何か禁欲的なものを割り当てる者は、この言葉の意味と崇高さを理解せず、神と一つにあるという感覚を失い、もしくは未だもつておらず、世界逃避と禁欲へのあらゆる問いをその背後に見ているのである」(五三頁以降)。ハルナックにとつて、この二つの表象が同一線上に立つことはなく、また彼の宗教的見解にとつて、確かにそれは尊重すべきことであろう。しかしそのために、かの時代のある人にとつても、「ハルナックにとつても」相互に同じ重要性をもつとは限らないということが、やはり証明されていない。卓越した人物の奥義は、まさにそれが一見すると相容れない

ものと相容れることに在るのである。ハルナックは既にこのこと自体を別の文脈で強調している。「我々は歴史の中に沈み込み、他の歴史的な伝承の下や、他の教養形態においては、如何なる対立も見出されず、むしろ両者が互いに並び立つことが出来たのは何故かを認識しなければならない」(三五頁)。彼がこの正しい原則をここで用いないならば、弁証家としての彼が歴史家としての自分を撃退したということが、ここでも示されている。

更に別の例を挙げてみよう。ハルナックは、福音が国家の法秩序を絶対的に拒絶し、それに対立するのではなく、またとりわけ「官憲の前で行う宣誓」(六七頁)の意味で、宣誓の禁止を理解するべきではないという主張を擁護している。このような解釈は、少なくともハルナックが行ったのと同様に根拠づけることは出来ない⁽³⁾。彼の唯一の議論は次のようなものである。「ヴェルハウゼン [Julius Wellhausen] が、この禁止の意味を取り違えないために、これに少しばかりの補足をすべきであると判断したことは正しい」(上掲)。天上にも地上にも、そのように証明され得ないものは何も存在しない。「ヴェルハウゼンの発言で、一件落着」 [Wellhausen locutus est, causa finita est] なのであって、これから示されるように、これはハルナックにとつて依然として別の問題の中で、最終的な結論となつてゐる。

最後にもう一つ例を挙げてみよう。「あなた方は悪に抗うことはできない」という有名な警告を用いて、それが「敵に對してもあらゆる場合においてその迫害の権利を放棄すること」を意味しないとハルナックは説明しようとする。「トルストイが語るように、官憲が罰するべきではないということか(そうなると、概して「官憲は」消滅する)。または、家屋と土地が無法に侵害されたりした場合、国民はそれらを護ろうとするべきではないということだろうか」。ハルナックは次のように答えている。「かの言葉でイエスはそのような場合を想定していたのではなく、……イエスは常に個々人のみを視野に入れ、愛において変わることにない心の信念を「想定していたのである」と、私はあえて主張をする。個々人の権利を訴求し、重大な刑の執行の際に、これらのことが成り立たないということは偏見である。その偏見は、未だ法律や法秩序の十分でない、かの言葉の文字に依拠しようとするが無駄である」(七一頁)。人によつて様々

な事柄が主張されるであろう。ハルナックにとって考えられないようなものが、当時、考えられるものであっただけでなく、当然なものとして捉えられ得たのである。従って、彼が偏見と見做すものは、当時の多くの人の眼には、多数の意見であったり、少なくとも道徳的な根本条件でも有り得たのである。

また、「仮に今日キリストが我々の間で説教したならば、この方は一般的には語らないであろう」（五四頁）という言葉は、明確な歴史的図像を呈示しているのではない。現在の価値概念は、まさに容易く過去に用いられるものではないのである。

このような例を更に挙げるのは困難ではない。ここではこの書物の事柄全体が想定されなければならない。しかし、既に挙げた証拠は、歴史叙述家の裁判権が弁証家の護教権と取り違えられていることを示している。その手法は、これらの証拠を通じて十分に素描された。ハルナックが、最初からこの命題に固執しているという印象がもたれている。その命題が保持するものを本質的なものと見做し、他のすべてのものを副次的なものと彼は見做すのである。彼が描写する宗教は、世界否定や世界逃避に関するものを、法秩序と権力闘争の否定に関するものを、貧困を称賛するものを、家族の繋がりに対して冷淡なものを、一切内包しておらず、その代わりに多くの他の美しいものが含まれている。それはハルナックの宗教的な信仰告白であって、我々に対して表出され、それによつて誰もが彼を尊敬するであろう。しかし、そのことから、ハルナックの宗教をイエスの宗教として説明しようと望むことは、少なくとも歴史的ではない。

むしろ多くの人々は、このように多くの事柄を近代化〔Modernisierung〕することによつて、我々が福音に関して驚嘆するのに慣れていたものは、輪郭を失つて薄められてしまったと考えるであろう。多くの人々の道徳的な要求に対してハルナックが次のように主張するならば、即ち、道徳的なものは必ずしも常に有効であるわけではなく、またそれらは定言的命令でもなく、すべての条件を視野に入れているのでもなく、それらに必ずしも例外なく従わなければならないのでもなく、むしろ諸条件の下で実行可能なだけであると彼が主張するならば、まさにあらゆるこの世の配慮に対

する冷淡さと、その前提の逆説と非妥協性の中で示された、道徳的な要求がもつ極めて印象深いもの、そして壮大な預言者の崇高さは、完全に放棄される(五四、五五、六七、七一頁など)。ここでは、ハルナツクは更に性質の悪い弁証家となっている。もちろん、歴史的な発展が正当な根拠をもつというのであれば話は別である。というのも、真の福音はまさにその生から——そう言い得るならば——歴史博物館へと運ばれるからである。二つの大陸の歴史は、この保存について語るべきものを知っている。

弁証的な態度決定が必然的に導くのは、福音の諸命題をしばしば解釈学的ではなく、説教学的に説明することである。これについては、幾つかの特徴的な典拠が呈示されるであろう。イエスが洗礼者ヨハネの二人の弟子に与えた答え(マタイによる福音書一一・五)は、ハルナツクに拠れば、次のものに他ならない。「悲惨、窮乏、病の克服と除去において、またこれらの実際の影響においてヨハネは、新しい時代が始まったと感じたであろう」「あらゆる悪、あらゆる悲惨は、彼にとつて何か恐ろしいものであった。それは巨大なサタンの国に属している。しかし、彼は自ら救い主の力を感じていた。虚弱が克服され、病が癒されるときにのみ、前進が可能であることを彼は知っていた」(三八頁以降)。ハルナツクに従えば、これが先の聖句の意味のすべてである。彼らが行った個々の行為については、彼は等閑視している。奇蹟の現実性について多くの頁が費やされているにも拘らず(二六一―一九、三七―三八頁)、ハルナツクがどのよう to これを問題としているのかについては、概して明白にはならない。このことに関して、確かにハルナツクの立場は「教育学的な観点において正当化されるが、彼は「歴史家」の立場には立っていない。明白に「何も定めぬ」(Ovidius)ということの方が、まだましであつただろう。また、マタイによる福音書五章二八節、三八節やルカによる福音書一四章二六節、マタイによる福音書一九章一二節、二一節のような聖句を説明する際に、明確な答えは実際には避けられており、説教学的な対照法がその代わりに置かれている(五二頁)。少なくとも次のことは認められるであろう。即ち、ちようどリッチュルがイエスの神性に関する有名な定義の中で実践したように、言葉を手段として、その意味と

思考を区別しないやり方と比較するならば、ハルナツクの講義はずつと鋭く、かつ殆ど正確に言及していることである。

同様に、法の貫徹を拒絶する福音の立場も、「イエスがそのようなものとしての法と慣例を軽視したことは有り得ない」ということを証明するために解釈されている。というのも、「神が最終的に法をもたらすことを、イエスはあらゆる敬虔な者たちと共に、固く確信していた」(六九頁)からである。このようなことは、説教もしくは教養本が論証するようなものであろう。ここで展開されているように、倫理的要請や神の義の特性が単純に互いに取り違えられて、一方を他方に押しつけるのであれば、それは解釈ではない。神の義を宗教的に信じ、法を道徳的に要求することは、二つの全く異なった事柄である。一方を他方から演繹することは許されない。というのも、そのような帰結は、論理学によつて禁止された「四個名辞の虚偽」〔quaternio terminorum〕を含んでいる。確かに、そのような傾向が極めて頻繁にあり、神についての教えが道徳的な法の場に、そして信仰の命題が義務的な戒律に置かれるなど、多くの例によつて教会史が示されている——これは、パウロ的なアナキズム〔An-Archia〕の所産である。どのような特性や御名を神に帰するかについては、常に意識が向けられてきた。しかし、人間の特性と美德に様々なものを帰することは稀であった。例えば、抑圧された者たちの解放や、それぞれの奴隷制の撤廃、拷問の廃止、あらゆる虐待については述べるものの、他のことに関して彼は全く黙したままである。一〇〇〇年もの苦難が、理論上かつ実践的倫理に関するこの歴史を物語っている。

依然として非常に不当な論争的性質が、広範囲に及ぶ弁証論を支えている。驚くべきことに、イエスと同時代のユダヤ教やそれ以前の数百年のユダヤ教の状態に関する歴史について証明することに、ハルナツクは殆どの場合において無関心である。特に「民族の公的な指導者」であるファリサイ派について、彼は全く酷い表象をもっている(三三三頁、五八頁)。部分的には、このような恐るべきイメージは、福音の幾つかの聖句を誇張することから生まれ、また部

分的には陰影的背景を造り出すために、勝手に妄想を用いて描き出したことから生まれている。「彼らは神を、組織内規則 [Hausordnung] の儀式を監視する専制君主 [Despot] として想定した」。これは多くのことを予告する序文である。これらの言葉は、「師の言葉にかけて誓う」[iurare in verba magistri] ことを強いられた大多数の聴衆の前で語られている。この時点で、ハルナックが特にこの警告「賢い者たちよ、自分の言葉に注意せよ」——もちろんフアリサイ派に関する——について考えていたならば。ハルナックは自分の主張に対して、何か一つでも、ほんの僅かな証拠でも見出したのだろうか。これは、ハルナックが示そうとした図像に鏡像として呈示するために、自分で、でっち上げたものである。「彼らは、隘路の迷宮、誤った道、隠された出口に対して作っておいた自分たちの法の中に、それを見ていた」と、教義史を著したこの人物は書いている。それをきちんとした文書で見たのでなければ、そのようなことは信じられないであろう。ハルナックは反対の事柄を知るために、かの時代の文学を一瞥したに過ぎない。タルムードが語り、その書物について既に教えることが可能であったほぼすべてのフアリサイ派の指導者たちもついていた、崇高な宗教的かつ道徳的教説について、ハルナックは何も知らないのではないだろうか。もしくは、詩編や預言者の書が当時は失われ、または廃れてしまつていたとでもいうのであろうか。これらは当時、全く重要ではなかつたのであろうか。ここでハルナックが語るよりも断定的に、不当な「歴史的」判断を下すことは困難である。「彼ら〔フアリサイ派の指導者たち〕はそこから何千もの戒律を所有し、そのためにそれを知っていると信じていた。この方〔イエス〕はそれについての戒律だけをもち、そのためにそれを知っていた」。これは、対照法的な議論のために作られた典型的な例である。「民族の公的な指導者」であり、神の教えの全体が内包するものを一つの命題の中に繋ぎ止めたヒツレルがいたことを、ハルナックは全く知らないのではないだろうか。「民族の公的な指導者」であり、宗教の全体が隣人愛の掟に内包されているのを見出したアキバがいたことを、ハルナックは聞いたこともなかつたのだろうか。人間が神の似像をもつことについて語つたベン・アサイや、敬虔な信仰が宗教の全体であることについて語つたシムライが、民族の中でどのような

位置づけであったかを、ハルナツクは知らないであろうか。ファリサイ派の教師たちが、「神の愛と隣人愛の掟の中にあらゆるものが関わっている」と告げていたことをハルナツクは否認し（三二頁）、既に示したように、民族の公的な指導者に関する二つの側面を否定するために――極めて重要な背景をすべて否定したのである。

イエスが「自分たちの民族の中で、豊かで深い倫理を見出した」（四五頁）ことを、ハルナツクは否定出来ない。イエスが説いたこと、「それは預言者の間でも、イエスの時代のユダヤ的伝承の中にさえ見出される」（三一頁）。事実は何れにも明瞭に語っており、多くの教会史家に大変な苦勞をもたらし、結果的にヴェルハウゼンによつて次のような無責任な言葉が発せられた。「確かに、福音が語るすべてのことはタルムードの中にあるが、残念ながら、それ以外にも、まだ多くの他のものもあるのである」。このようなヴェルハウゼンの言葉のように、語調の重要性が内実の重要性に対して全く関係をもつておらず、このように恭しく熱意をもつて模倣的に話されるような言葉は、恐らく稀有である。それらよりも本当らしいものは何もないが、それらよりも自明なものを見出すことも困難である。例えば、木と葉を比較する者がいて、含みのある語調でその帰結を次のように告げたとしよう。「木は葉を含むが、まさに他の多くのものも含んでいる」――このようなものが、ヴェルハウゼンの判断が我々に語り掛けるのと同様の深遠な思慮なのであろう。あらゆる支流を含む六〇〇年のユダヤ文学に関する書であるタルムードには、「あなたの隣人をあなた自身と同じように愛しなさい」という一つの掟の中にすべてが関わっているとする命題意外にも、確かに他の多くのものがある。しかし同じように、六〇〇年のキリスト教文学において、特にハルナツクの書物から読み取れるものよりも、更に多くの他のものや、まさに素晴らしい崇高なものがある。共観福音書記者による〔κατά〕福音は、タルムードと良くも悪くも比較され得る。それはちょうど葉を木と、脚を馬と比較する場合と同様である。単純な概要〔Aperçu〕ではなく、内実の正確さと合理性を重視する人は、新約聖書の福音〔das Evangelium des neuen Testaments〕をせいぜいタルムードの福音〔das Evangelium des Talmud〕までと比較するであろうが、ヴェルハウゼンが行ったように、タルムードの全

体とは比較しないであろう。共観福音書記者によつて見出された個々の思考領域が、タルムードの中でどのように確言され、表現されているかが精査されなければならない。そのことによつて、タルムードによる福音が獲得される。まさにこのことによつてのみ、共観福音史家の福音との並行関係が打ち立てられるのである。またそのようにしてのみ、ヴェルハウゼンの見解⁽⁶⁾から解き放たれた、はるかに正当な学術的帰結に至るのである。その場合、タルムードの言葉は新約聖書の文体の中に移し替えてみるならば、その結論は更に印象深いものとなるであろう。言語的な装いの等価性は、内実の等価性を更に明らかにするであろう。⁽⁷⁾

イエスが説いたものを、ハルナツクは次のようにもう一度認めている。「それをフアリサイ派ももっていたが、彼らは残念ながら、その他にも多くのものをもっていた」(三一頁)。好ましくない事柄については概して沈黙するために、一人の間を、その者がどれ程偉大で卓越していても、真逆の人物像を包括するような民族性全体と比較することは、ハルナツクのこの文章が、上述したようなタルムードの言葉をこの人物に語らせたということを指し示しているに過ぎない。ここで述べられたことは、この人物に当て嵌まる。フアリサイ派が靴職人であつたならば、当然彼らは知恵と敬虔についてだけでなく製靴業についても語り、彼らが法律の教師であれば、勿論法律についても語るのである。

フアリサイ派について歪んだ判断を行ったハルナツクの根本的な誤りは、次の点に原因がある。それは即ち、律法上または儀式上の個々の問いと、宗教的かつ道徳的見解との間を彼が区別しなかつた点である。それはハラハーとアツグダーとを殆ど一つにしているのであつて——後者は広い意味で理解される——その結果、それらの問いはあらゆる道徳的かつ宗教的考察を含んでしまつている。そのために、更にこれから示されていくように、二つの全く異なつた領域が完全に相互に入り込んでおり、結果的にイエスの道徳的な見解と、フアリサイ派の道徳的な見解とが対比されているのではなく、法律的かつ儀式的な決断が対比されているのである。ハルナツクがこれについて言おうとしたものは、次のように喩えられる。即ち、ある仏教徒が、自分の宗教とプロテスタンティズムを比較する際に、最も崇高な仏陀の教説

を、安息日ないし教会会議の交渉、火葬もしくはホルシュタインの牧師の論争、説教師の顎髭の許可ないしは聖職者の職制服、兵役期間に教会の儀式を遂行する者もしくはこれに類似した「教會的な」問いを——プロテスタントの者に勝利したと告げるために——挙げるだろうか。このような事柄を、ハルナックはフアリサイ派に関して述べているのである。宗教的な思考と感情は、「彼らの下では、困難とされ、曇らされ、歪められ、無効とされて、宗教にとつて慈悲や審判と同様に重要であると彼らが捉え、理解していた何千もの事物によつて、その重大性は奪われてしまった」(三一頁)。「彼らは神を、組織内規則の儀式を監視する専制君主として想定した」(三三頁)。従つて、先程の仏教徒は、ハルナックがここで挙げた文章の中で行つたよりも、こじつけについて論理的に考えて書いている。彼はまさに、「アツガダーとハラハーを互いに混同してしまつているのである。「慈悲や審判と同じくらい重要だと考えられている」典禮儀式書や教理問答書について彼が語る時、仏教徒に同様のことをもつて反論されるかどうかは別の問題である。——我々は、宗教を「職業技術」にした人々がフアリサイ派の中にいたことをタルムードから知ることが出来る。それでは、そのような人々を含まない宗教的共同体がどこにあるであろう。例えばハルナックがシューラー [Emil Schürer] の歴史書^{*2}から知り得たような、タルムードよりも強いこのような脚色を、誰も厳しく批判していない。しかし、個々の事例から、普遍的な結論を導こうとすることは、論理学の根本的思考や正当性と矛盾する。誰かある人が、古い時代や新しい時代にプロテスタントが行つた偽善者ぶりを指摘して、まさにそれがプロテスタンティズムの根本的要素であると述べるならば、そのことについてハルナックは何と云うであろう。まさにハルナック自身の言葉が、これと同じことをしているのである。「彼らは宗教から世俗的な職業を生み出した——このことよりも忌まわしいものはない」。これは、ハルナックがフアリサイ派に対して懸命に行つていたことと同様の論理と正当化であるだろう。しかし、ある宗教を、その極めて気高く、純粹で、崇高な要素に従つて評価し、これに対してユダヤ教を、時には弊害や劣つた現象に従つて評価することは、結局のところ、多くの教会史家のやり方となつてゐる。ハルナックが歴史家に求める「活けるものへの新

鮮な眼差し」によつて、彼自身はユダヤ教に対して殆どもしくは何も示していない。

ハラハーやアツガダーが何であるかについての不足した知識は、次のような発言の中にも示されている。「この方（イエス）がラビのシナゴグで学んだというのは殆ど有り得ない。この方は、神学の専門教育や学術的な解釈技術を身に付けた者のようには一度も語らなかつたからである。これに対して、使徒パウロの手紙から、パウロは神学的な教師の下で学んだことがはつきりと知られている。イエスは聖なる書物において活動したが、職業的教師として活動したのではなかつた」（二〇頁以降）。ここでのすべての文章が誤りを含んでいる。最初の主張に関しては、イエスがラビの下で弁論家のように語つただけで、アツガディストや説教師、宗教的思想家や詩人のようには語らなかつたとしたならば、ハルナツクの主張は正しかつたであろう。このことについて知っている者ならば、イエスの話し方が「ラビの」霊的な説話であることはすぐに認められる。イエスのあらゆる発言、譬え、慰めの言葉が、ラビの弟子であることを示している。イエスの説教と、パウロの教え方は、ラビの間ではよく知られており、ラビによつて洗練されている。即ち、パウロと同様にイエスはラビだったのである。ハルナツクのように評価する者は、当時のユダヤ教の靈的な生の大部分について知らないか、それについて何も見ようとしていない。イエスが「シナゴグ」に現れて、そこで説教し、はつきりとした言葉で語つたという事実が既にある（特にマルコによる福音書一・三九、ルカによる福音書四・一四以降）。それに関して、特に、イエスがシナゴグの中に現れたことが注目されたという点を、ハルナツクが典拠として挙げていないのは遺憾であり、彼は恐らく全く気付いていないのであろう。殆どの場合、イエスの説教の圧倒、この方の言葉の力が注目されたことについて触れられているだけである（マタイによる福音書七・二八以降と並行箇所）。そして、ナザレの人々の驚きは、周知のように、イエスが彼らのシナゴグで教えたことに求められていない（マタイによる福音書一三・五四以降）。あたかもイエスが道端で教えても、同様に彼らが驚くかのようなのである。結局、イエスが「職業的教師のようにはなく」、聖なる書物において生きてきたとハルナツクが説明すれば、これは再び、時代状況の知識が不足

していることを示している。職業的教師は——この言葉は、ハルナックが初級の教師を視野に入れていない意味で用いられているが——当時には無かつたものである。近世の教授たちのように、教師たちは無給であつた。教師たちは、自らの生の歴史の中に眼差しを向けた、職人、農耕者であり、生のために働く人々であつた。ハルナックがイエスの説教について述べているのと同じものが、彼らの言葉に当て嵌まる。「嘆きと涙、笑いと驚喜、富と貧困、飢えと渇き、……旅泊と帰郷、結婚と葬儀、……畑で種蒔く者と刈取る者、……世俗的な食事とその消費、教師と弟子の霊的な関係——これらすべての図像によつて、この方の話は生き生きとして、靈的に子どもである者たちにも、それらが理解できるようにされている」(二三頁)。

ここで言及した特性の他に、ハルナックはフアリサイ派において更に様々な他の否定的な特徴を見出している。「とりわけ、フアリサイ派や聖職者も属していた支配的階級は——貧しい民族の窮状に殆ど心をかけなかつた。あらゆる時代とあらゆる民族においてそのような階級の間で見られるものよりも酷いということはなかつたようであるが、それでもそれは酷いものであつた。ここで更に付け加えられるのは、儀式と儀式の『正当性』についての関心の方が、貧困への同情と慈悲よりも優先したことである」(五八頁)。これらすべては、単なる想像と捏造である。むしろ、それほど広範囲に経済的弱者を保護した時代が稀であつた。かの時代の貧民救済法は、アツガダーのように、多くの証拠を提示している。しかし、この事実は、単純に無視されている。他の学問の中ではあえて行われもしないことが、ユダヤ教に対しては行われ、罪に問われず、許されているように思える。確かにハルナックは二つの論拠を示している。最初の論拠は、「国家による圧政と暴政が、詩編記者とすべての心の温かい人々の、長く変わらない、尽きることのない主題であつた」。これについては多くの議論の余地があり、まさにそれが詩編記者の変わらない主題であつたことについては、ここでは全く無視されている。歴史的な方法にとつて、このような論拠が基礎となるのであろうか。ハルナックも確かに知っているように、まさにこの時代に極端な立場の聖書批評家が詩編の個々の箇所になつていたのであり、こ

のようならずと以前の時代からの言説が、イエスが生きた時代の状況を判断するために証拠とされているのである。再び現代の問題に当て嵌めてみよう。一九世紀の終わりのドイツにおける社会的な状況に関する画像を、誰かが三〇年戦争の時代からの報告に基づいて呈示し、「とつくの昔に」の一言を数百年の裂け目に用いようとするならば、ハルナツクはそれについて何と言うであろう。——二つ目の論拠は次のものである。「仮に富める者たちが自分たちの義務を無神経に怠ることがなかったならば、イエスが実際に話していたようには、この富める者たちについて語らなかつたであろう」。私には、福音の当該箇所を恐らくそのように理解することは許されないように思われる。福音のこの言葉は本来、豊かな者たちの職権濫用と怠慢の罪に対して向けられたものではない。イエスは豊かな者たちを非難するよりもむしろ、豊かさを非難し、とりわけ貧しい者たちを元気づけようとしているのである。彼は預言者に従って、価値概念を再評価し、貧困を善いものとして、貧しい者たちを善い者たちとして説明している。貧困は負担ではなく、天の国への義務と道である。財産を獲得することを、貧しい者は求めてはならない。これに対して、豊かな者の使命は、自らの宝を前に差し出し、貧しくなることである。というのも、それは至福のための最初の条件だからである。自分の富を手放さず、増やす富者は、そのことによつて天の国への道を閉ざしている。豊かな者ではなく、貧しい者が幸福であるべきである。貧しくなり、そうあり続けることは、望ましい目標である。これが貧困と富に関する福音の見解である。当時の有産者に課せられていた義務を無神経に忘れるならば、そこからは何の帰結も決して導き出されない。無制限に慈善事業を行う時代の中で、イエスがまさにこのことについて話していたというのは有り得ないであろう。というのも、ここでイエスにとつて問題となつているのは、自らの生のあり方が依拠する原則だからである。

かの時代における貧しい者たちの位置付けに関して、ハルナツクは続けて次のように述べている。「(彼らは)「極めて僅かな儀式の恵みや利益を得られない程、あまりにも貧しいことがあり、抑圧され、圧迫され、不当にも虐待され、神殿を仰ぎ見ることも出来なかつた」(五八頁)。このような文章において理解されるべきなのは何であろうか。この言葉

をもつて、貧しい者たちは供儀に参加しなかつたと言われるならば、常供の献げ物であるタミードの事実と矛盾する。タミードは、民族全体の名において、ある意味では貧しい者やその中でも最も貧しい者によって献げられるのである。⁽⁸⁾ またハルナックも知つてゐるように、既に聖書の中で述べられてゐるような、日常の供儀は、最も貧しい者が少額の寄付を献上するというやり方が定められていた。そして、これが同様に神に受け容れられ、豊かな者の最も高額な喜捨よりもずっと神に受け容れられるということを（マルコによる福音書一二・四三と比較せよ）、タルムードは繰り返し強調している。貧しい者たちが抑圧され、圧迫されてゐたというのは、同じように単なる空想上の背景である。既に言及したように、この時代の歴史において、貧しい者を積極的に保護することや、またこの者に与えられた権利救済は明らかであつた。また、フアリサイ派の文学全体を通じて、貧困に対する敬意は一貫しており、単なる貧困への温かい憐憫だけではない。事実の前には、ハルナックの感情的な文章は何の関心ももてないことが見出される。

ハルナックが「詩人の国へと」行き損じた結果は、彼が福音の聖句を歴史的に評価できなかつた点にも示されている。ハルナックに抛れば、神の国によつて、民族もしくは国家ではなく、個人が救済され、天の国が「ここかしこではなく」、我々の内側にある（三九頁）という教えは、純粹に福音に固有の見解である。しかし実際には、それは、既にエレミヤやエゼキエルが極めて明白に語つていた考である。特に後者は、福音を実際に書いた記者に多くの点で関わつてゐる。タルムードの多様な形式の中で、特にハルナックが用いた同様の考え方の中で表現されたことは、既にバツヒャー〔Wilhelm Bacher〕の「アツガダー研究の中に垣間見られるものであろう。ここで典拠を挙げるには多くの頁が必要となるであらう。

同様のことは、「福音を通じて『初めて』、各々の人間の魂、各々の哀れな魂の価値が保証された」（四四頁）とするハルナックの主張にも当て嵌まる。これに対しては、再びエゼキエルやタルムードを示唆するべきである。「各々すべての人のために世界は創造された」、「あらゆる人間の魂は世界全体よりも大きな価値をもつ」（「サンヘドリン篇」三七

a、「ペラホート篇」(六b)など、これらすべてがタルムードの中に書かれている。——ハルナツクは次のようにも主張している。「イエスは、倫理と、外的な儀式や宗教の技術的な実行との繋がりを鋭く分断した。この方は、礼拝の儀式と密接な、偏向的で利己的な『善き行い』に関わることにについて、もはや知ろうとは望まなかつた」(四五頁以降)。ここには、既に我々に押しつけられているものと同様の誤解が存在している。二つの全く異なつた領域が混同されているのである。聖書と、かの時代の豊富な道徳的教説におけるように、倫理は全くもつて儀式とは結び付けられておらず、儀式からは完全に独立しており、そのような独立性のために、倫理は儀式と対立することもあつた。ハルナツクや他の者たちが誤解した原因は、儀式が道徳的な基盤として位置付けられ、また道徳的な目的を実現させようとしていたことや、異教徒から遠く離れたものを儀式が倫理化しようとしていた事情に依拠している。しかし、そのために、儀式と倫理を互いに同一視することや、互いに融合させることは行つてはならず、儀式の他にも道徳的な教説や行為の広大な領域が存在していたのである。フアリサイ派が道徳について語つた決疑法〔causatisch〕的な事柄にハルナツクは言及しているが、後の時代にキリスト教の基盤としてもたらされた事柄を、彼はユダヤ教の中にもち込んでいた。更にそのために、ここでもハラハーと倫理を彼は混同しているのである。宗規的かつ儀礼的戒律と同様に、民事的かつ刑事的法律は、当然今日の法律学の中で行われているように、世間一般の規範を個々の事例に適用することが出来るように決疑法的に取り扱われる。タルムードから決疑法的に倫理を扱う例を呈示することに、ハルナツクは成功することはないであらう。

ハルナツクがそれ以外にも、福音に「固有の道徳的な思考領域」として見做しているものは、道徳的な行為において信念が先行していることや、あらゆる道徳的なものが愛に起因していること、そしてまさに謙虚さにおいて道徳が宗教となるということである。——これらすべては、ユダヤ的な倫理に他ならず、それらはタルムードの中に見出される。そして、それはユダヤ教の精神であつて、それらすべてから発したこの精神が我々に語り掛けているのである。勿論、

ハルナツクはこれに対する異論を準備している。道徳的な源泉は、当時ユダヤ教に流れていたが、それは汚染されており、まさに「ラビたちと神学者たち」が、「後から」の水を蒸留〔destillieren〕した」（三一頁）のである。ハルナツクはこのように語り、この講義の中で福音の言葉を弁証論による七重のフィルターを通して濾過させている。自分の欠点に対して他人の欠点を非難するのは人間のやり方であるというタルムードの文章が無意識に思い起こされる。ラビたちは、ハルナツクが過去の研究者たちに求めたようなものを、どうして自らのために用いなかったのであるか。どうして彼らは、本質的なものを強調せず、生き生きとしたものに新鮮な眼差しを向けようとしなかったのでしょうか。それを行うのは単に、プロテスタントの神学教授たちの特権に過ぎないのであるか。しかし、ユダヤ神学者たちにとって「蒸留すること」が何を意味するかは明白である。もし誰かが時折遠慮がちにであつても、モーセの三番目の書（「レビ記」）一九章一八節の中に「あなた自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」という聖句が書かれていることを指摘し、それに加えて、まさにそれと同じ第三四節の中に「あなた自身を愛するように、あなたたちの下に寄留する者を愛しなさい」という聖句が述べられていることについて指摘するならば、その意味は明白となるであろう。そのような寄留者たちの間で、人間は他の民族から、そして他の信仰から理解されなければならない。というのも、この聖句に基づくならば、「なぜなら、あなた方もエジプトの地においては寄留者であつたのだから」であると続けられているからである——ドイツ祖国の様々な教壇から、すぐに「寄留者を見よ！」という非難が鳴り響くであろう。もしくは、もし誰かが、例えば安息日の取り方や無数の他の検討された律法については多くの規程がタルムードの中に含まれていると言いつがましく述べることなく、山上の説教のような言葉と同様のことを語るタルムードの箇所を呈示するならば、この者は再度蒸留したことになるであろう。そして、もし最終的に誰かが、困難な時期において安息日が単純に歴史的な骨董品となるのを、またその他の同じようなことが言われるのを、安息日についての厳格な規程が妨げたのであつて、そのことからハラハーに書かれた安息日についての厳格な規程は歴史的必然であつたとするならば、——この者は

蒸留しただけでなく、世界のあらゆる偽りの美しさによって、虚偽の着色をしたのである。もしコーランが、ユダヤ教徒やキリスト教徒のような「啓典の民」を、彼らが啓示を改竄したとして非難するならば、また現代の神学教授たちが、ラビたちを、彼らが聖書と口伝の教えを蒸留したとして非難するならば、これと同様のことが当て嵌まる。

イエスと同時代のユダヤ教が受難するメシアという考えをもっていなかったというハルナツクの主張（八五頁）に眼を向けるならば、恐らくハルナツクが蒸留について捉えていたものは、正当というよりもむしろ表面的なものである。シューラーはこの問題を正しく慎重に、かつ思慮深く自らの規準において扱っており（Ⅱ五五三―五五六）、それに抛れば、ハルナツクが短い文章の中で示したほど、確証的な結論には至らなかった。シューラーはこの史料を模範的なやり方で運び集め、整理した。ここでは、この思考の歴史的な価値を評価することの出来る幾つかの点について呈示されているのみである。イザヤ書五三章の中に受難の考えが人間の罪のために十全かつ決定的に確認されることは、疑う余地が無い。聖書以後の書物の中に、この考えが共有されている痕跡は見出されないと仮定したとしても、だからといって、この書物が成立した時代に、この考えが異質であったと証明したことにはならないであろう。当時最も権威をもっていたのは聖書であって、聖書がこの思考を雄弁に語っていたというだけで十分である。聖書以後の文字がその思考を含まないために、イエスと同時代のユダヤ教にその思考が欠けていると見做そうとすることは、――再び現在の例を用いて説明するが――我々の時代にハムレットに固有の考え方についての知識が認められないとして、それは我々の時代には一つの詩的な描写としてもはや見られないからであると述べるのと同じである。いつまでも同じものに従おうとするあらゆる試みを排除するような文学的な形式が存在した。しかし実際には、ユステイノスやタルムードにおけるような立場も多数存在していたのであって（シューラーの前掲書を参照）、それに抛れば、イザヤ書のメシアに関する解釈が当時も一般的であって、更に言えば、それが自明なものと思われていたことを明白に示している。これに反対するような解釈を含むような立場を挙げることによってのみ、このことを論駁することが出来るであろう。そのようなこと

は、これまで呈示され得なかつた。例外となるのはタルグム・ヨナタンからの典拠である。ここでは、神の僕の受難について語っているイザヤ書五三章の聖句が、メシアとは関係がないとされている。しかしこのような解釈は規準的な性を有していない。というのも、我々はこの古い「正式な」タルグム・ヨナタンをもはや所有しておらず、極めて安易に論争的な皮肉を含んだ、後代に編纂されたものが我々に残されているからである。従つて、メシアの贖いの受難という考えが「大部分また全体としてユダヤ教に異質であり、常に学派的な見解に留まつていた」と恐らく言い得るであろうとするシューラーの総括は、更なる考察が必要となるであろう。

ハルナツクに歴史的な説明が欠如していることは、神殿破壊やベタル（ペートル）の事件に繋がる政治的な事件の流れが、使徒と同時代の歴史に——一方はメシアがやつて来ると言い、他方はメシアが再来すると述べる点に、ユダヤ教徒とキリスト教徒の間の相違があつた時代に——どのような影響を与えたかについて、ハルナツクが殆ど顧慮していない点にも見出される。また同様に、イエスが生きた時代の風土全体を十分に考察することも殆ど顧慮されていない。このことは、メシアの希望がこの時代においてどれだけ親密なものであつたかを理解するためにも必要不可欠であるし、イエスが自らそのことを信じていたことを理解するためにも必要であろう。というのも、イエスの弟子たちはイエスをメシアとして信じていたからである。イエスとその弟子、及びかの時代全体を理解するために感じ取らなければならないのは、どのような生活空間の中で当時のユダヤ教徒が、特にパレスティナのユダヤ教徒が生きていたかである。また、どのような人間が歴史的事件を通じて形成されたかが知らなければならない。バビロニア捕囚、イスラエルから^{もみがら}籾殻をふるい落としたこの^{ふるい}篩、すべての動揺した者たちがエズラとネヘミヤを通じて力強く取り除かれたこと、マカバイ戦争においてこのような精神が大きく隔たつたこと——これらすべてが、適者生存〔survival of the fittest〕の結果として、一連の自然的な選別であつた。残されたのは、その宗教を勝ち抜いた者たちの共同体である。仮にこの時「その宗教の偉人たち〔Virtuosen〕」がいたとすれば、それらの殆どはこの宗教を勝ち抜いた者たちであつた。かの時

代のユダヤ人は、スポルジョン〔Charles Haddon Spurgeon〕の表現を用いるならば、「世界の偉大な非国教主義者」であり、そのほぼすべての者たちが、理想のために自らを献げることが可能で、またその準備が出来ているような人間であつた——それは、他の場所でも起こつていたように、目的のためだけでなく、生の充溢もしくは良き死のために、必要に迫られて、もしくは律法が命じることによつてであつた。殉教者になり、天のために地上の賢い者たちの前で愚かな者となることが出来る力は、古代世界ではユダヤ人によつてのみ生み出されていた。そして、そのユダヤの遺産は、後の時代にも依然として見出される。ローマの著述家の書いたものを読みさえすれば、ユダヤ人が異教徒の世界全体でどれだけ奇妙で不可解な存在と見られていたかを、そして彼らがどれほど滑稽で、あるいは不気味で、殆ど化け物のように見られていたかを知るであろう。福音を理解しようとするならば、このようなユダヤ人を知らなければならぬ。

また、このことは我々にもう一つの事柄を示唆している。イエスの生を描いた者の殆どは、イエスがそのあらゆる特徴において完全に真にユダヤ的な人物であつたこと、そしてユダヤ教の地においてのみ、他の地ではなくまさにそこにおいて育つた人間であつたということを示唆するのを控えている。イエスは真にユダヤ的な人物であつて、イエスの努力と行爲、感情と感覚、語りと沈黙は、ユダヤ的な刻印を、ユダヤの理想の特徴を、ユダヤ教の中にあり、当時はユダヤ教の中にしかなかつたものの最上の特徴を担っている。イエスはユダヤ人の中のユダヤ人であつた。他の民族から、イエスのような人間は現れなかつたであろうし、他の民族において、イエスのように活動する人間もいなかつたであろう。そして、他の民族において、自分を信じる使徒をイエスは見出さなかつたであろう。——イエスの人格を生んだこのような土壤に、ハルナツクは眼差しを向けなかつた。

これらが、ハルナツクの書物の根本的な誤りである。¹⁰即ち、弁証論的な意図、ユダヤ文学とユダヤ学の考慮不足である。アブラハム・ガイガー〔Abraham Geiger〕は、数十年前に非難を込めて次のように書いている。「諸々の事柄を否定的に判断し、その独立した研究に対して必要な諸前提と諸能力が欠けているならば、実際にあらゆる他の領域に関し

でも、二重にも三重にも再考するであろう。ユダヤ教に対してのみ、制約を受けずに恣意的に仕事を始めてよいと思われている——この言葉は、残念ながら今日においてもその時事性を全く失っていないし、ハルナツクに対しても繰り返されるべきであろう。ハルナツクの書が多く卓越したものを含み、各々の頁が読者を刺激し、叙述の仕方が常に賛嘆を呼び起こすものであることは、ハルナツクの書物では自明であるために、彼の本であれば素晴らしいものであると殆どの場合に考えてしまうであろう。特に、宗教に普遍的な問い、宗教と労働の関係、宗教と学問との関係について言われることは、あまりにも真で美しいために、ハルナツクが自分の熱狂者に対して「宗教の本質」に関する書物を贈呈してくれることが常に望まれているのである。

最後に、もう一つ触れておきたい。ハルナツクが、これらすべての説明にも拘らず、自分の表現に異論があるかも知れないのならば、イエスを通じてもたらされ、作り出された重要な事柄が依然として残されており、その結果、この世界宗教は誇りをもってイエスの名を冠しているのであると述べるならば、次のように簡潔に答えることが出来るであろう。ありふれた言い方でヴェルハウゼンが述べたように、アメリカは周知のようにコンプスに因んで名付けられたのではないということによつて、このことは恐らく容易に理解されるのである、と。しかし、このような返答は冒瀆的な冗談に過ぎず、答えではない。その答えは、当時の時代が実現されたということだけであつて、その実現された時代が、神によつて使わされた人物を必要としたのである。異教徒にとつてイスラエルの教えが受け容れられ始めることが可能な時期が到来していたのであり、その為に神は自らに属する人々にそれを行わせたのである。キリスト教の創唱者に対して、ユダヤ教は既に愛と尊敬の念を抱いていた。キリスト教に対してユダヤ教が憎悪を抱いていたという作り話が頻繁になされてきた。しかし、そのようなものは無かつた。母が子どもを憎むことはないが、子どもが自らの母を忘れ、否定することはある。痛ましいことであるが、キリスト教は自らの創唱者の精神について、極めて僅かにしか示してこなかつた。新約聖書の譬えの中には、深い意味がある。「ある男に二人の息子がおり、彼は一方に向かつて行き、

こう話した。息子よ、私の葡萄酒に行つて、今日は働きなさい。息子は、主よ、私は行きますと答えたが、そこには行かなかつた……。このキリスト教の話の中の事柄が、しばしば現実となつてゐる。しかし、世界の歴史に関わる使命を力強く実現し、依然として実現し続けるこの宗教を、そして何百万もの人々を幸福にし、慰撫し、立ち上がらせたこの信仰を認めず、もしくは傷付け、蔑むようなことは、特にユダヤ教神学にはそぐわない。またユダヤ教の神学者も、キリスト教徒が弁証論を書き、自らの宗教のために称賛の書を著すことを、善い、高尚なことであると捉えるであらう。これに対して、ハルナックは異議を申し立て、弁証論を歴史として偽り、それが歴史的な不正に対して武器となると信じたに過ぎない。また、弁証家の武器と防塁は、純粹で、非難されざるものでなければならぬ。恐らく、そのような真の弁証家において、精神の独立性のようなものやルナン〔Ernest Renan〕⁽¹¹⁾の自由が生きているのである。彼は率直に次のように述べていた。「ユダヤ教は過去において極めて偉大な仕事を成し遂げ、それを未来においても果たし続けるであらう」。

(11) 内は訳者の補語及び原綴り。

原註を(一)付き数字で、訳註を*付き数字で表記した。

原註

(1) 『キリスト教の本質』を指す。この書は全学科の学生に向けて、一八九九／一九〇〇年の冬学期にベルリン大学においてア

ドルフ・ハルナツクによって行われた十六の講義から成っている。これは一九〇〇年にライプツィヒのJ. C. Hinrichs'sche 出版社から刊行された。

(2) この時代の言葉について、ハルナツクは正確に認識していなかったように見える。「神の国」と「メシアの時」という二つの異なった概念は、全く分離されて理解されるべきである。ハルナツクの語る「政治的・幸福主義的希望」は、神の国ではなく、せいぜいメシアの時と結び付けられていた。

(3) ハルナツクはここで、マタイによる福音書二二・二一の有名な言葉「カエサルのはカエサルに……」について議論している。しかし、ゼーロータイ〔熱心党〕に対する反対を含んでいるこの言明の真の関連性に、ハルナツクは気付いていないようである。例えば、ガイガーの文献を参照。Geiger, *Abraham, Das Judentum und seine Geschichte I*, Breslau, 1865, S. 112; 172.

(4) この点については、ハルナツクは奇妙にも殆ど全く触れていない。

(5) ハルナツクが「とりわけフアリサイ派や聖職者の属する支配者階級」と述べる時、フアリサイ派が民族の全体においてもついていた「教的な」意味について不確かな知識しかもつていなかったことをハルナツクは示唆している。

(6) ヴェルハウゼンの不首尾に終わった概要についての判断が、この作品を軽視することに結び付けられない点は明白であるが、この偉大な学者が驚くべき方法によって宗教史や、特に聖書学にどんな役割を果たしたかについては強調されるべきであろう。それにも拘らず、彼の序文や歴史は依然として、この分野ではキューンの著作に次いで示唆的な叙述を行っている。

(7) ここで示唆しているものを明らかにするには、一つの例を呈示するだけで十分であろう。「(ラビ)エルアザル・ベン・アザルヤの言葉「七〇年に一度、死の判決を下していたサンヘドリンは、破壊的〔法廷〕と呼ばれなければならない」(「マツコト」七a)は、次のような形式の中で理解される。「古人たちが述べていたように、法廷に責任を負う者を、法廷が死刑に処するのである。しかし、あなたがたに言っておこう。七〇年の間に一人の者を死に追いやった法廷と同一の法廷が、殺人者の顧問官なのである」。これによって、新約聖書中の多くの言葉が明るみになる。

(8) ヨセフス『ユダヤ古代誌』III, 9, 1を参照。「そして、或る者は個人のために、そして他の者は公のために献げ物をした」(III, 10, 1 (sc. *iegouyia*) *hno tan idorotn, etega de hno tou dhlou dwtelouhetai*)。

- (9) エゼキエルの根本的思考についての優れた研究は、コルニル〔Carl Heinrich Cornil〕の『預言』を参照。
- (10) カトリックとプロテスタントについて扱っている章には、このような批評は当て嵌まらない。——『教義史教本』(I, S. 58の註)では、フアリサイ派に関する評価はそれ程極端なものではない。もちろん、ここでの「反対命題において」ではなく、そこでは「命題において」という表現が見出される。
- (11) とりわけ、ヘルナー〔Albert Friedrich Berner〕が『ユダヤ教とキリスト教』という講演の中で語った力強い言葉が思い起こされるであろう。

訳注

- * 1 Gass, Wilhelm, *Geschichte der Christliche Ethik I*, Berlin, 1881.
- * 2 Schürer, Emil, *Geschichte des jüdischen Volkes im Zeitalter Jesu Christi*, Leipzig, 1886.